日本エネルギー経済研究所 創立60周年記念イベント　2026年7月3日

60周年出版企画
『大転換期の国際エネルギー秩序』

一般財団法人日本エネルギー経済研究所

理事　首席研究員

小林 良和

本書の背景と目的

- 本書の背景
  - 大きな揺らぎを見せる国際秩序
  - 「想定外」の事象が相次ぐ地政学的情勢
  - 複雑化する気候変動対策
  - 経済安全保障問題に対する関心の高まり

- 本書の目的
  - 「国際エネルギー秩序」というコンセプトを元に、現下の国際エネルギー・気候変動情勢が大きな転換期を迎えていることを明らかにし、今後の日本にとっての戦略的な10の提言を行う。

IEEJ © 2026

本書の構成

- 序章　総論（分析視点としての**国際エネルギー秩序**）
- 第1章　国際エネルギー情勢と**エネルギー安全保障**
- 第2章　不安定化する**気候変動**のガバナンスと貿易秩序
- 第3章　クリーンエネルギーが生み出す新たな**経済安全保障**問題
- 第4章　**石油・ガス**を巡る国際秩序の動揺と展望
- 第5章　国際エネルギー秩序における**中東**の位置付けとその変容
- 第6章　日本が取るべき**10大戦略の提言**

IEEJ © 2026

序章　分析視点としての国際エネルギー秩序

- 国際エネルギー秩序とは？
  - **世界のエネルギー問題の安定と持続可能性という世界益を保全するためのもの**
  - 具体的には、①国際エネルギー安全保障を守る、②国際エネルギー市場の秩序を守る、③気候変動などエネルギーに関連した地球環境問題に対応する、などのメカニズム
  - 国際エネルギー秩序のあり方や主要な担い手、その対象範囲は変化しうる。

- 国際エネルギー秩序の課題・問題点
  - 誰がどのようにして国際エネルギー秩序を守るのか？
  - 秩序の維持・管理に要するコスト負担はだれが負担するのか？

- 国際エネルギー秩序をめぐる論点
  - 国際エネルギー秩序の中心である米国が今後どのような政策・戦略を国内外で展開するのか
  - 米中対立の行方がどうなるのか
  - 世界の分断・多極化が進む中、新たな国際協調の体制・枠組みがどのように構築され得るのか

IEEJ © 2026

第１章　国際エネルギー情勢とエネルギー安全保障

- 国際エネルギー情勢をエネルギー安全保障の視点から読み解き、それが国際エネルギー秩序とどう関わってきたのか、そしてその関わりは今後どうなっていくのかを論ずる章

- エネルギー安全保障と国際エネルギー秩序とのかかわりは大きく変化
  - 過去の関わり：石油問題を中心に機能
    - 石油危機以降は、OPECとIEAという二つの組織が産油国と消費国双方の利害を代表する組織として機能
    - シェール革命に対するOPEC側の機能強化の試み
  - 現在の関わり：国際エネルギー秩序の対象が拡大・多様化・複雑化
    - 気候変動対策への関心の高まりと現実的なエネルギー安定供給確保との相克
    - ウクライナ情勢が突きつける天然ガス供給における秩序構築の必要性
    - 古くて新しいシーレーン問題
    - 電力需要の増加と電力の安定確保、重要鉱物含む経済安全保障の確保

- **今後予想される国際エネルギー情勢の下での、エネルギー安全保障問題と国際エネルギー秩序の課題は何か？その中で日本が対応すべき事項とは？**

IEEJ © 2026

第２章　不安定化する気候変動のガバナンスと貿易秩序

- 国際的な気候変動ガバナンスや貿易秩序の国際エネルギー秩序との関わりを主題に論述する章

- グローバルガバナンスの典型例としての気候変動対策
  - 国際交渉を通じた国際的合意の形成によって定められる各国の気候変動対策
  - 地球環境を守る「地球益」を追求する一方で、各国による「国益」追求の場でもある気候変動交渉
  - 京都議定書の成立とその限界、パリ協定への結実、ネットゼロ排出と脱炭素化の時代から脱炭素化への反発
  - 気候変動ガバナンスの不安定化がもたらす国際エネルギー秩序の動揺

- 気候変動のルールメーキングの世界がもたらす貿易秩序への影響
  - とりわけ重要かつタイムリーなテーマとして炭素国境調整措置（CBAM）の問題
  - 気候変動対策の名の下での自国・自地域市場の防衛と自由貿易体制に対する不確実性の増大

- **気候変動分野における国際エネルギー秩序のあり方がもたらす日本へのインプリケーションとは何か、日本はどのように対応すべきなのか？**

IEEJ © 2026

第３章　クリーンエネルギーがもたらす新たな経済安全保障問題

- 国際秩序そのものの動揺が、国際エネルギー秩序の不安定化を通して経済安全保障問題に及ぼしている影響を論考する章

- 国際秩序の動揺と経済安全保障問題
  - 経済的な相互依存が互恵的なものではなくリスク要因としてみなされるように変化
  - 経済安全保障上の重要課題としての重要物資の他国への依存度低減

- クリーンエネルギーの推進と新たな経済安全保障問題
  - クリーンエネルギーは化石燃料への依存低減を通して伝統的なエネルギー安全保障の確保に寄与
  - しかし、クリーンエネルギー技術の特定国への輸入依存度の高まりを介して、新たな問題を生み出す
  - 特に重要分野としてのレアアースの安定供給をめぐる問題
  - 2010年レアアース危機と日本の対応

- **国際エネルギー秩序との関連で、レアアースの問題にはどのような対応戦略が求められるか？レアアース問題で日本が取るべき内外戦略とは何か？**

IEEJ © 2026

第４章　石油・ガスを巡る国際秩序の動揺と展望

- 世界最大の国際エネルギー貿易財である石油とそれに次ぐ重要性を持つガス・LNGの国際秩序の問題に焦点を当てる章

- 脱炭素をめぐる課題が明らかになる中、石油とガスの重要性が改めて認識

- 国際石油市場における国際秩序
  - 国際石油市場では、OPECによる余剰生産能力やIEAによる備蓄等の需給調整メカニズムが形成
  - しかし、米国の現政権による国益最大化行動やUAEのOPEC脱退などにより国際秩序が動揺

- 国際天然ガス・LNG市場における国際秩序
  - 国際市場化が進んでいない、高い備蓄費用等から国際的な需給調整メカニズムは存在せず。
  - 主な天然ガス供給国（米・カタール・豪・露）の政策や行動には国際秩序を担う姿勢は見られず。

- **石油・LNGの安定供給の確保が日本にとってのエネルギー安全保障上の最重要課題であり続ける中、新たな情勢下での石油・ガスを巡る国際エネルギー秩序に日本はどう対応すべきか？**

IEEJ © 2026

第５章　国際エネルギー秩序における中東の位置付けとその変容

- 石油の最大の供給地であり、その地域情勢がこれまでの国際エネルギー秩序に多大な影響を及ぼしてきた中東のあり方を議論する章

- 国際エネルギー秩序における中東
  - 豊富な石油埋蔵量と世界の石油輸出量に占める高いシェア
  - 豊富な余剰生産能力を抱え、需給調整機能を果たすサウジアラビアと米国との「特別な関係」
  - チョークポイントとしてのホルムズ海峡とバーブルマンデブ海峡

- 中東秩序の再編と国際エネルギー秩序
  - アブラハム合意の成立を契機とした域内のパワーバランスの変化
  - 米・中・露間の大国間競争の中での湾岸諸国による戦略的自律性確保の模索
  - 2026年2月28日以降のイラン情勢が世界のエネルギー市場に及ぼす影響

- **国際エネルギー秩序の鍵を握り続けている中東の安定と秩序のあるべき姿とは何か？中東の持続可能で安定的な将来の発展に向けて、世界はどのように向き合っていけば良いのか？**

IEEJ © 2026

第６章　日本が取るべき10大戦略の提言

- 第5章までの論考を踏まえて日本が取るべき10大戦略を整理し、提言する章

- 提言の主な内容
  - 現状および今後予想される国際エネルギー秩序に対応するための国際戦略
  - 日本にとって目指すべき国際エネルギー秩序の形成のための戦略
  - 今後の国際エネルギー秩序を踏まえた国内エネルギー戦略

- **詳細は本書をご覧ください！**

IEEJ © 2026